

1. 高砂市歴史文化基本構想について

この構想は、文化庁の委託事業である「文化財総合的把握モデル事業」にもとづき、高砂市が策定するものである。本構想は、教育振興基本計画の歴史文化に関する取組みのバックボーンとなるものであり、高砂市のまちづくりに活かされるものである。また、後世に向けて歴史文化が引き継がれていくことの必要性和重要性を指し示すものである。

(1) 考え方の背景：地域の個性や魅力を形成する歴史文化資源に対する関心の高まり

近年、地域の豊かな文化を活用して、地域づくりを目指す取組みが行われようとしている。特に21世紀に入り、重厚長大産業に頼るのではなく、文化と経済の相互関係により成長を目指す取組みに、注目が集まっている。特に経済のグローバル化とともに地域の経済活動は活力を失い、社会の流動化とともに基盤となるコミュニティも脆弱化していることから、活力を取り戻すため様々な活性化策が行われているが、地域との関連性がうすく持続的な取組みに結実しない事案も見受けられる。こうしたなかで、地域の歴史や伝統から「地域の個性」を見だし、これを反映する地域固有の環境(歴史的風致)を維持・向上させることで、後世に継承する取組みが、地域づくりの方策として行われ始めている。

こうした動きと併せて、地域の個性や魅力を形成する重要な資産として、歴史文化資源に対する関心が高まり、文化財の保存活用にに向けた機運も醸成しつつある。

(2) 計画の位置づけ

① 構想策定の背景と目的

高砂市においても歴史文化資源をテーマにした取組みがいくつか行われている。平成15年度の「竜山石シンポジウム」では1,700年間にわたって利用されてきた竜山石採石史の実態が発表され、続く竜山石フォーラム(平成16年度実施)で、石の育んだ地域文化が固有の価値を持つことや、これが地域づくりに活用できる可能性が共有されたところである。

また一方、みなとの発展に関連深い歴史的資源の保全・活用などについては、臨海部の魅力を高めていく「高砂みなとまちづくり構想」が平成17年度に策定された。また、まちづくり構想の実現に向けた取組みの一環としては、地域住民主体で始まったイベント「たかさご万灯祭」があり、そして高砂町地区にのこる歴史的建造物を活用しながら、新たな賑わいを創出しつつある。

加えて、第4次高砂市総合計画の策定、今後のまちづくりの指針となる都市計画マスタープランの見直し、教育振興基本計画の策定など、新たに、地域の歴史や文化に市民が関心を寄せ、豊かな地域文化と住民のあり方を考え直す好機だといえる。それは、地域の歴史文化に光をあて、豊富な歴史文化資源の存在や、関係性を総合的に把握し明らかにすることであり、さらには、歴史文化資源によって象徴される、地域の歴史文化が高砂市の個性を形成し、現在の生活環境の立脚点となっていることを再確認することでもある。これを踏まえることで、歴史文化資源の一体的な保全活用に取組みながら、高砂市の文化や地域づくりの将来の方向性を見据えようとするのが、本構想策定の目的である。

② 構想の位置づけ

本構想は高砂市総合計画の中に位置づけられる歴史文化の保全継承に係る基本的考え方を整理したものである。新たな教育振興基本計画(平成22年4月策定)では、高砂市における教育の目標を「ふるさと高砂を愛し、思いやりとたくましさで満ちあふれた人づくり」と掲げ、ふるさと観の形成を大きな主眼においている。本構想は、まさに高砂市の「ふるさと観」を再認識するために具体化する取組みである。同時に、今後の高砂市の文化財の保存活用の方向性について示すものである。

つまり本構想は、高砂市の施策における歴史文化の考え方について基本姿勢、理念を示すものであると同時に、長い時間の中で歴史文化が形成した「高砂の個性」を再認識し、現在、高砂市に住まう市民のすべてが分かち合う中で、次代に向かって歩みを進めるための取組みである。

高砂市では、昭和63年に、謡曲「高砂」ゆかりの地として「ブライダル都市高砂」を宣言するなど、地域の個性を前面に押し出した理念や施策などを展開してきた。本構想は、さらに、地域の個性を歴史文化に求め、現在に至る地域の歩みを再整理するなかで、次代へ継承する方向性を見つけようとするもので、地域の歴史文化資源の保存活用に対する意識醸成や、これらを活かした地域づくりの鍵を見つけ出すことができる。

(3) 構想の期間、見直し

本構想は、その進捗状況や成果、新たに生じる課題等に応じて適宜見直す必要がある。本構想は概ね今後十年間の方向性を示すものとする。構想の実現化に向けては、今後五カ年を目標とした実施計画を立案する。

本構想にあげた文化財群を捉える視点は、現段階で最も効果的と判断したものであるが、地域の歴史文化の捉え方はさまざまで、これに限らず多様なものが想定される。今後、本構想に基づく取組みの中で、またその見直しの際に、別の視点から歴史文化を捉えることも想定される。

